

ペルセポネの冒険
—蘇雪林によるギリシア神話の再話「ト賽芳的被劫」—
Persephone's Adventure:
Hsueh-Lin Su's Rewritten Novel of Greek Mythology "The Rape of
Persephone"

龔 月婷
GONG, Yueting

摘要

In 1957, Hsueh-Lin Su published a collection of rewritten novels of Greek mythology. Among them, *The Rape of Persephone* was a reworking of the stories of Persephone and Demeter from Greek mythology. Viewed from the current research on *TianMaJi*, we may find out that most of them focused on Su's political view, moral standpoint and so on, while the study from other angles was extremely scarce, for example, there is a lack of research perspective as focusing on female images. *The Rape of Persephone* was a rare work based on the mother-daughter story in the rewritten novels of Greek mythology in the 20th Century China. In this essay, I apply a perspective of gender studies to examine the uniqueness of Su's Persephone Image and analyze the mother-daughter relationship depicted in the novel.

キーワード：蘇雪林 ギリシア神話 「ペルセポネの掠奪」 再話

Keywords: Hsueh-Lin Su Greek mythology *The Rape of Persephone* rewriting

1. はじめに

蘇雪林（1897～1999）は五四時期¹の代表的な女性作家である。1921年からフランスに留学し、1925年に帰国した。代表作は『緑天』（1928）、『棘心』（1929）である。1949年に彼女は中国大陸を去り、1952年から台湾に移住した。「反共」と「反魯[迅]」の立場のため彼女は90年代まで大陸文壇で黙殺されてきた。蘇雪林は儒家の道德思想に深く影響されていたために、作風が保守的だと評されてきたが、彼女の文学は周縁的位置から女性の新しい側面を提示しており、多様な着眼点から再評価する価値がある。

蘇雪林はギリシア神話を愛読し、西洋文化に深く魅了された作家であり、神話学の研究者でもあった。日中戦争末期、国立武漢大学で教えていた蘇雪林は屈原の辞賦の研究をきっかけにギリシア神話研究に取り組み始めた²。1950年、彼女はパリ大学、フランス学士院で神話学方面の授業を聴講していた。また、蘇雪林が西洋神話研究をはじめた当初は、彼女の親友、西洋文学研究者・袁昌英³（1894～1973）からの協力を受けていた。同時に、西洋神話への強い関心に

より蘇雪林の文学にも新しい契機やモチーフが出現した。1946年、彼女は小説「森林競楽会」を創作し、1957年ギリシア神話を基にした14作の短篇小説を集めて『天馬集』を台湾で出版した。これは蘇雪林が台湾に移住した後、出版した唯一の小説集である。構造として、『天馬集』は小説と巻末の作者による注釈からなっている。また、大部分の収録小説は執筆年が不明だが、概ね40年代後半から50年代までに創作されており⁴、近現代中国の知識人がギリシア神話の再話に熱心に取り組んでいた時期——30、40年代と比べると遅れている。なお、近現代中国のギリシア神話を再話した作家の中で、蘇雪林は唯一の女性作家であり、さらに他の作家と比べると作品数が多い⁵。従って、蘇雪林の創作の面や文学史的面のいずれの角度から見ても『天馬集』は重要視されるべき作品であり、ジェンダー学等の視点から見直す価値がある。

他方、蘇雪林は『天馬集』収録の小説について、「ギリシア神話を基としているとは言え、改作した所が多く、さらにオリジナルな人物やプロットを入れた場合もある」と述べており、「私が行っていたのは小説の創作であり、文学の考証ではない」⁶と明言している。つまり、『天馬集』は小説の範疇に属しており、原典の翻訳・紹介と同一視してはならない。

しかし、『天馬集』についての研究は数少なく、文学研究界ではこれまであまり注目されてこなかった作品と言える。ここでは、大陸の祝宇紅と朱双一による考察、及び台湾の蔡玫姿の考察を紹介する。

祝宇紅によれば、近現代の左翼知識人による神話の再話に見られる社会革命のメタファーに反し、『天馬集』では作者の秩序と権威の維持を提唱する姿勢は明らかである⁷。こうした『天馬集』には蘇雪林のもつ文化保守主義が窺え、なお同じような傾向は『棘心』にも見られるという。また、祝はもう一つの考察で、『天馬集』と曾虚白『魔窟』(1929)の共通性を論じ⁸、二人の作家とも「神話の再話で体现された観念は半新半旧のものであり、先進的な西洋唯美主義の傾向がある一方、中国の旧伝統の刻印も見られる」と指摘している。

朱双一は『棘心』と『天馬集』に見られる蘇雪林の保守主義的傾向を巡って論じている⁹。この二作品において、蘇雪林は道徳を重要視しながらも個々の人間の欠陥や差異を認め、人間性の方を重んじるという態度をとっており、『天馬集』における神々に人間性を付与した彼女はギリシア神話のヒューマニズムの精神を継承したと朱は述べている。

一方、蔡玫姿の考察¹⁰では、『天馬集』の創作背景や作者の創作心理等が論じられ、作品の意義と価値も肯定的に評されているが、個々の小説への注目や人物像の細緻な分析などは欠如している。とりわけ、蔡は『天馬集』を作家の文化・道徳観の考察に恰好な対象と見なしながら、本作品の文学面での価値を軽んじている。また蔡が取り上げた女性の登場人物は「盗火案」のパンドラだけであり、誘惑に弱く動じやすい彼女は『天馬集』における唯一の個性際立つ女性の人物だと指摘されている。だが、欲望との関係性だけで女性の登場人物の役割や価値を決め付けるといふ蔡の考え方に筆者は疑問を抱いている。『天馬集』では、女性を中心とした小説の数がほぼ全体の半分以上を占めているため、女性の登場人物の重要性と位置付けを再検討し、作者

の女性観、また本作品の文学的価値について再評価する必要がある。

以上の先行研究は、研究者の関心はほぼ作者の政治的立場や文化・道徳観、保守主義等に向けられている。尚且つ論考の切り口や結論付けの方向性も類似しており、政治的傾向、文化・道徳思想以外の着眼点が提示されてこなかった。『天馬集』における女性像を中心とした研究、とりわけジェンダー学の視点から考察を試みた研究は、管見の限り見つからない。よって、新たな角度からのアプローチを試みる余地があると考えられる。

今日に至っても、文学研究界での『天馬集』への関心、若しくは主たる論点は、作者のもつ政治的傾向から離れておらず、確かにその面への注目は不可欠である。しかし、蘇雪林自身は、『天馬集』収録の作品について、「前述の主題〔強権主義反対の主題。筆者注〕とは関係ない小説が何作かあり、どれであることを明示する必要はないと思う」¹¹と述べていることから、『天馬集』の主題はイデオロギーの面に限られていないことがわかる。また、『天馬集』中で最も注目されている作品はプロメテウス物語の再話の「盗火案」である。しかし、長い間注目を得ていない小説が何作か見られる。例えば、本稿で取り上げる「ト賽芳的被劫（ペルセポネの掠奪）」¹²（以降本小説の題名は和訳で表記する）は、ギリシア神話の中のデメテルとペルセポネの物語に基づいた小説であり、研究者に注目されてこなかった作品の一つである（次節で詳述する）。

『天馬集』収録の小説の原典について、作者は明示していない。但し、1957年の蘇雪林の日記及び晩年の自伝によると、創作の際に彼女は英語と仏語の資料を多く参考にし¹³、また当初武漢大学図書館からギリシア神話の英語版、袁昌英から英・仏語版を借りて読んでいたという¹⁴。そのため、「ペルセポネの掠奪」の原典を絞るには、主に人物の名とストーリーの面から判断するしかない。周知のように、ギリシア神話とローマ神話における神名はしばしば異なっている。『天馬集』の場合、蘇雪林はギリシア名とローマ名を混用している¹⁵。ここから、少なくとも彼女がギリシア神話だけでなく、ローマ神話をも参考にしたと考えられる。また、ストーリーの面で見れば、「ペルセポネの掠奪」の大筋は古代ローマのオウィディウス『変身物語』第五卷（340-405行）、古代ギリシアのホメロス風「デメテル讃歌」のはじめ（5-25行）と合致している¹⁶。40年代の武漢大学図書館で閲覧可能なこの二文献の英訳を調べてみると、主に、『変身物語』にはA・ゴールディング訳（1967）、G・サンディス訳（1968）、J・ミラー訳（1916）等が、「デメテル讃歌」にはG・チャップマン訳（1924）、G・エブリンホワイト訳（1914）等が見られる¹⁷。また仏訳の方は、当時入手可能なものに、G・ラファイエ訳 *Métamorphoses* 3 巻本（1925～1930）、J・トラブーコ訳 *Hymne homérique à Déméter*（1933）等が挙げられる。蘇雪林は上記の『変身物語』と「デメテル讃歌」の英・仏訳本を読んだ可能性が高いが、自伝の記述から、当時武漢大学では仏文資料より英文資料の方が入手しやすかったことがわかる¹⁸。従って、本稿では、『変身物語』と「デメテル讃歌」、この二文献の英訳と照合しながら論述する。

本稿はジェンダー学の視点から出発し、「ペルセポネの掠奪」に描かれたペルセポネ像に焦点を当て、原典と照合しながら蘇雪林の小説の独創性を明らかにする。第2節では近現代中国の

ギリシア神話の再話の基本的状況を紹介し、第3節から「ペルセポネの掠奪」におけるペルセポネの人物造形に注目し、その特徴及び独自性を述べる。また、ヒロインと母との関係性を論じ、並びに作中の薔薇のもつ象徴的意味を分析する。第4節では、ペルセポネから見る母の花園の意義について考える。本稿は、小説におけるペルセポネ像のもつ特徴や重要性に光を当てることを通じて、蘇雪林文学での「ペルセポネの掠奪」の位置付けと価値を再考し、また女性作家による神話の再話という角度から『天馬集』を中国近現代文学史上に位置付け直したい。

2. 近現代中国におけるギリシア神話の再話と『天馬集』

五四時期の中国では、西洋の先進的思想や文化が盛んに受容され、ギリシア文学の翻訳と紹介も受容の重要な一環となった。ここでは祝宇紅の整理した当時の文壇のギリシア神話再話の状況に基づいて述べる¹⁹。20年代、周作人をはじめとする知識人たちはギリシア神話の研究、翻訳紹介に力を注ぎ、30、40年代の左翼文学隆盛期に入ると、ギリシア神話・悲劇を基にした文学作品が次々と現れる。特に、人類に火を与えるプロメテウスの伝説は左翼知識人に革命理想の表現として頻繁に再話され、代表的な例には、鄭振鐸「取火者の逮捕」(1934)と聶紺弩「第一把火」(1941)がある。一方蘇雪林の「盗火案」は、鄭と聶の小説に反し、プロメテウスを英雄ではなく、悪魔に騙され秩序を壊す者として描いている。その他、朱雯によるオイディプス物語の再話である「謎」(1939)は古代ギリシア人の運命観を表しており、1943年端木蕻良によるプシュケ物語の再話である「蝴蝶夢」、月神とエンデュミオンの物語の再話である「女神」、ダブネ物語の再話である「琴」の三作はギリシア神話中の愛欲や女性の美を表現している。但し、この時期の男性知識人によるギリシア神話の再話の大多数は女性を中心としたものではなく、むしろその描写には女性の客体化が甚だしい。こうした女性の登場人物の周縁化、客体化及び主体性の欠如が普遍的であった状況で、母と娘の絆に注目して母娘間の葛藤を描く作品は滅多に見られなかったのも不思議なことではない。ましてや近現代中国のギリシア神話の再話に関心を寄せる研究には、母娘関係に着目するものが未だ見られないのも当然である。こうしてみると、女性作家の蘇雪林に描かれる「ペルセポネの掠奪」は、近現代中国のギリシア神話の再話という範囲の中でも珍しく母娘関係を語っている作品であり、その特殊性と価値がなおさら際立ってくる。

他方、左翼文人の神話小説に見られる革命・階級闘争を提唱する姿勢や意図に対し、蘇雪林は『天馬集』で、「左翼文人が神を共産主義の敵として描く以上、本書は勿論それに反する道をとることとする」²⁰と述べ、また創作の意図について、「ギリシア神話を題材として民主主義を宣揚し、強権的な共産主義に反対する」²¹ことだと表明していた。この発言に対して祝は、当時の政治的背景が蘇雪林の文学実践に影響を及ぼしていることを認めた上で、「蘇雪林が共産主義に反対するというより、寧ろ自由と民主の秩序や権威を主張し、また独裁的強権と急進主義の運動に反対する」²²と言った方が適切だと指摘している。また、50年代に『天馬集』を出版

したとき、その執筆動機について蘇雪林は序文で述べているものの、ギリシア神話への関心、また台湾の学者・糜文開からの助言以外に言及していない。但し、1957年『棘心』増訂版²³（光啓出版社）の序文で蘇雪林は、20、30年代には「色々な心配があった為、自由に書けなかった。十数年が経ち、周りの人も環境も大きく変遷してきた現在は、そういった心配が既になくなったので、言いたいことを全部吐き出し、書きたい事実も思い切って書く」²⁴と述べる。以上から、時局の変遷を経て、台湾に移住した蘇雪林はイデオロギー面で忌避する必要がなくなり、いわば反共の主張をより明白に表し、さらに反共を盛んに宣伝しても左翼勢力からの攻撃を受ける心配などがないため、『棘心』の修訂と同じように、共産主義への不満や批判等を『天馬集』で表そうとすることは本小説集の執筆及び出版を促した要因の一つではないかと推測できる。

また、前述の通り、『天馬集』収録の小説の主題はイデオロギーの面に止まっていないため、本稿では、「ペルセポネの掠奪」を蘇雪林の言う「別の趣旨」を表す作品の一つとして論じたい。本小説で、蘇雪林はペルセポネの性格に原典にはなかった彩りを添えただけでなく、母が中心であった元の説話を娘中心の物語に書き換えている。さらには、彼女の抱く共産主義への印象、大陸への想いも隠喩的な形を通してこの作品に込められていると考える。

3. ペルセポネ像の諸相

3. 1. 「デメテル讃歌」、『変身物語』との照合

「ペルセポネの掠奪」と原典との相違は、①中心人物と物語の構成、②ペルセポネの処女性、③ペルセポネを誘惑する花、といった三点にまとめられる。細かい相違点は他にも見られるが、ひとまず最も際立つ三点を挙げ、「ペルセポネの掠奪」の全体の独自性について述べる。

①について、ギリシア神話において、ペルセポネの物語は殆どの場合、母や夫の物語と不可分であり、彼女を中心とした話はほぼ見られない。「デメテル讃歌」も『変身物語』も、母のデメテルを物語の中心とし、特に前者では娘を失った母の放浪、母による娘の奪還のくんだり骨子である。一方、「ペルセポネの掠奪」の場合は、娘が第一主人公となっている。母と離れ離れになる前の娘の様子が描かれており、物語は娘が攫われる場面で終わっている。

そして②について、原典ではペルセポネは冥王に連れ去られてから、強制的に彼の妻にされた。最後は、娘が地上に戻り、母との生活が回復したとはいえ、彼女は地下と地上の両方の世界を往来する女神となった²⁵。それに対し、「ペルセポネの掠奪」におけるペルセポネは終始、地上での少女の姿である。掠奪された後の彼女の運命、即ち処女喪失の運命は原典との関連で考えれば予見しやすいと言っても、小説の中では描かれていない。

最後に、③も重要な相違点である。拉致が起こる際にペルセポネの摘む花は、『変身物語』ではすみれや白百合であり、「デメテル讃歌」では水仙であった。なお後者の花がゼウスとハデスによる罠であったことは注意を要する点である。一方、「ペルセポネの掠奪」における花は薔薇である。こうした道具の違い及び薔薇の象徴性について後で詳述する。

総じて、蘇雪林が「ペルセポネの掠奪」において最も大きく改作した点とは、娘を物語の中心人物としていることだと考えられる。

3. 2. 「ペルセポネの掠奪」におけるペルセポネの形象

前述のように、「ペルセポネの掠奪」ではペルセポネは終始処女性を保った少女の姿により登場している。それでは、彼女が具体的にどのように造形されているのかを見てみよう。

ペルセポネの最も目立つ印象という、美しき天真爛漫な少女のイメージである。例えば以下のような描写が見られる。

ペルセポネ姫は僅か十四か十五ぐらいの歳であり、彼女の麗しい金髪はオリュムポス山の中腹にたなびく雲の様に、日差しに映えて輝いている。(…)彼女の瞳は幼い女の子の無邪気さと純潔さしか映さず、些か強情さを帯びているが、とても和やかに見える。彼女は非常に賢い一方、極めて単純な子だ。(…)アプロディテの様な成熟した女性の美しさをこの未熟な少女ペルセポネの麗しさと比較すれば後者の方がより愛らしいだろう。ペルセポネは馨しい春であり、新月であり、蕾であり、また悠々と流れる波だ。(159-160 頁²⁶)

以上から、ペルセポネの無邪気さと愛らしい外見が目につく。それだけでなく、彼女は強い冒険心と強情さの持ち主である。一例として、彼女があえて難問に挑む場面を挙げる。

ペルセポネは幼い頃から母親に溺愛されていた為、我儘な性格に育ち、しかも異常に負けず嫌いな子である。ほどけない玉連環を彼女は無理にでもほどこうとして、結局金の槌で砕いてけりをつけた。また解けないスピックスの謎を彼女はなんとしても当てようとし、失敗して命を失ったほうがましだと考えている。(171 頁)

また、ペルセポネの強情さは彼女が冒険を愛好することからも窺える。

姫は花に夢中になっている。(…)彼女は情熱さと大胆さの持ち主だから、花を収集するために、断崖絶壁といい、深山幽谷といい、一人でも敢然と行く。母親はいつも彼女に冒険をし過ぎないようにと言いつけていたにも関わらず、彼女は気にせず依然として己のやり方を通して行く。(164 頁)

この二つの例から、ペルセポネの持つ反抗心と大胆さがうかがわれ、母親に注意されながらも彼女はひたすら己の意思通りに行動することが示される。

もう一つ、古い伝説中のペルセポネには春を司る女神という身分がある。だが、「ペルセポネ

の掠奪」では蘇雪林のオリジナルな設定として、ゼウスがペルセポネの幼さを理由に、この職権を暫く彼女の母親に預け、代行させることとした。これは、ペルセポネが裕福な日々を送り、非常に恵まれている姫のように見えるが、実のところ、彼女は母親の保護・支配の下に置かれ、力を持つことができない女神であることを意味しているとも読める。

要約すると、ペルセポネには①美しき天真爛漫な少女、②大胆で強情な少女、③力を持つことができない女神、といった三つのメインイメージが見られる。原典と比べれば、このような人物造形はより肉付けがなされているだけでなく、ペルセポネの性格付けも後の彼女の行動ないし掠奪の発生に伏線を張っている。

3. 3. 母との関係性

「ペルセポネの掠奪」の最も魅力的で、かつ肝心な点と言え、それは娘と母とのアンビヴァレントな関係である。このアンビヴァレンスは、母と娘の共生関係及び母による束縛、母から切り離されたいという娘の潜在的願望、男性の関与によって進められる母娘の分離、といった四つの点により表現されている。本節ではこの四点を踏まえ、論述を以下三つのパートに分けて展開し、娘としてのペルセポネの相をより明晰に提示したい。

(1) 母娘の共生及び母による束縛

ペルセポネと母の共生関係については、以下のように描写されている。

彼女の名はペルセポネ。これは地母デメテルの掌で捧げられている真珠で、いや、彼女を母親の体内のもう一つの心臓と言っても過言では無い。彼女と母親とは血も肉体も繋がっており、脈動も通じ合っていて、生命さえ一つになっている。もし娘を失われてしまったら、地母も生き続けることが出来なくなる。(159 頁)

これは明白な母娘の一体化の表現であり、ペルセポネと母との繋がりの強さを表している。だが、母に大事にされてきたと同時に、娘は過度な愛情と保護を受けざるを得なかった。

姫は地母のたった一人の娘である為、母親が彼女に注いだ愛情は重過ぎるものであった。まるで積もる雪の重さに耐えられず枝垂れる松の様で、または、長時間の雨で潤い過ぎて垂れ下がり、美しさが損なわれた玉蕪の花の様なのだ。(161 頁)

この表現を母の愛情による娘の自我への抑圧や損害の暗喩と見做すことは可能であろう。また、これに似通う抑圧／束縛の暗示は、以下の母の科白からも垣間見える。

冥界にある四つの河と地獄で罰を受ける罪人の惨状について、取り敢えず今は詳しく教

えないことにするわ。あなたの幼くて脆い心臓が怖さに堪えられなくなりかねないからね。

(…) 地下界の未来永劫に変わらぬ暗闇、この一つのことだけではもはや堪えられる人がいるわけではないんだわ。私たちは暗い片隅で少し長く居続けていたら、胸が裂けるほど苦しくてきつくなる。まして冥界の闇は未来永劫に続くものなのよ！未来永劫に！（169 頁）

このように、母は娘に冥界の存在を告げ、冥界の暗闇や怖さを娘に思い知らせようとしている。続けて母は娘に心配する気持ちを表す。

母さんから注意しておきたいことがあるわ。私たちの暮らしているこの大地には冥界に通じる深い穴が沢山ある。(…) いつも外で花や草を摘んだりするあなたを見ると、母さんはとても不安だわ。万が一あなたも危険な目に遭ったらどうすればいいか…と思うと、心配でたまらないのよ！娘よ、もっと謹んでこのような思いがけない危機に注意をしないと！（169-170 頁）

以上の科白は勿論母による愛情表現と見做すことができる。但し、娘に冥界の怖さを繰り返して強調することから、家の外には不可知な危険が待ち構えているので、母の側から離れてはいけないという意図も窺えるのではないか。言い換えると、娘の心に恐怖の種をまくことで娘の外出を阻止しようとする母の思惑がうかがわれる。さらに言えば、一見すると母からの忠告のようだが、その根底には娘に対する束縛のメタファーが潜んでおり、或いは娘が禁忌を犯して母の手の届かないところへ行ってしまう可能性への母の不安が読み取れる。一方、母が娘に冥府は亡霊を受け止め、生まれ変わりの機会を提供する場所だと説明する際、娘の「そうでしたら、冥府は寧ろ温かく明るい場所ではありませんか」（167 頁）という問い返しからは、娘の無邪気さだけでなく冥府に対する認識の欠如も表れている。このように、娘は無意識のうちに母からの暗示を受けとめる一方で、冥界の怖さを実感していない。母が注意したことによって、かえって娘の中の反抗心、好奇心が促されかねない。この意味で、ペルセポネが冒険に夢中になることは、彼女の内面に潜む離反心の裏付けと言える。

もう一方、母と娘が共に暮らしている家・花園も母からの束縛の暗喩として考えられる。何故ならば、園の内部の至福の光景と外部の危険は、この園は閉鎖的空間であること、或いは境界線が設置されていることを暗に示し、さらに言えば園が外界との隔絶を意味するからである。従って、家のイメージは花園よりも、堅固で安全な結界の方に近い。こうして考えると、ペルセポネの外出行為は外の未知の危険に向かうことに等しく、ある種の越境行為と見做せる。

もう一つ興味深いのは、母による束縛の不完全さである。具体的に言うと、母は強い好奇心を抱く娘に対し、「娘への教育方針にはしばしば難しく、なす術がないと感じている。まして普段は娘を甘やかしてきたため、今更性格を矯正しようとしても容易いことではない」（161 頁）。

また、娘は注意されてはいたが、依然として園と外部を往来する自由を保っている。即ち、母は娘の好奇心を抑圧しようとする一方、行動的には抑圧や制限を徹底していない。結果的には娘に能動性を保たせ、娘の越境行為を放任することとなった。

(2) 娘と母の分離

それでは、分離の契機について考える。まずは、掠奪が起こる前の場面に注目する。

時間は段々晩くなっていき、他の仙女たちが家に戻りたがっているが、姫はまだ興味津々でもっと花を摘もうとしている。

郊外の果てには大きな森がある。その森は草木が茂っており、薄暗い。仙女たちは怖がり、そこに入る勇気がない。この日、姫は籠を背負い、鋤を持ち、一人で森に冒険しに行った。(170 頁)

以上より、ペルセポネは一人で神秘の森に入ったことがわかる。そして、掠奪者・冥王の登場直前の場面は以下のようなものである。

夕日は段々西の方へ沈んでいき、果てしなく広がる夕闇の幕が大地を覆い、梟が人の不幸を喜ぶように冷笑し始め、蝙蝠が不吉な予言を綴るように空を旋回している。ペルセポネはもう家に戻らないと母親を心配させてしまうと思っている。目の前の薔薇に対して最後にもう一回折り取れるか試してみて、もしまた失敗したら、今日のところはあきらめて、明日仲間を呼んで彼女たちに手伝わせようとペルセポネは考えた。(171-172 頁)

ペルセポネは薔薇に夢中になったせいで母の元に戻る時間を守れなかった。その結果、薔薇をとった途端に彼女は攫われる。よって、薔薇は掠奪の直接的な誘因であり、若しくはペルセポネの薔薇への執着が母との分離のきっかけであったと言える。

ここで、娘が一人で森に入ることは特筆に値する。H・シクスーは「森に入ることを」、女性が掟を破り、限定されたルート／規範から逸脱する象徴的行為と見做している。シクスーは赤ずきんちゃんを例に、「彼女は女性が決してしてはならないこと、つまり自分自身の森を横切るということをしませ。彼女はあえて禁止されていることをし……それに対して高い代償を払います」²⁷と述べ、代償とは、狼・男性が待ち構えているベッドへと戻ることだという。又、「自分自身の森を横切る」とは、女性が自ら内面のタブーを破ることの象徴的表現である。ペルセポネの場合、彼女の冒険はまさにシクスーの指摘に当てはまり、即ち掟の打破と見做せる。だが、赤ずきんちゃんと同じ様に、結末で彼女は男性・冥王に攫われるという高い代償を払う。

また、原典における掠奪寸前の場面を見ると、ペルセポネは孤立状態ではなかったことがわかる。それだけでなく、「デメテル讃歌」では、ペルセポネの泣き声はヘカテとヘリオスに聞き

付けられ、後に二人は事件の犯人がゼウスとハデスであることをデメテルに告げた。一方『変身物語』では、冥王に掴まれていく処女神の惨状を途中で泉の妖精・キュアネが目撃し、キュアネはその場で冥王の犯行を阻止しようとしたが失敗した、というエピソードがある。しかし、『天馬集』におけるペルセポネは最初から単独行動をとり、危機に迫られた時も孤立無援の状態であった。ラストシーンは以下のようなものである。

姫の泣き叫ぶ声が森の中に響き渡り、段々遠くなっていき、微かになってしまい、やがて再び何も聞こえなくなってしまう。空を旋回していた蝙蝠の姿はもはや完全に夜の暗闇に溶けてしまい、もう見えなくなってしまう。樹の蔭の奥に隠れている鼻だけがまだけたたましい笑い声を発し続け、とても満足しているようだった。(173頁)

恐怖で陰鬱な雰囲気の中で、救援者どころか、ペルセポネの声を聞き付ける者は一人もいない。その声も物語の終焉の到来に伴い、強引に切断されてしまう。ここからは、ペルセポネの絶望、無力さや惨めさが感じられる他、鼻が満足しているようであることも母の忠告に従わなかった娘を嘲笑っていることの暗喩的表現と見做せるであろう。なお、母の庇護の範囲、家の外に出れば危険な目に遭うという示唆も読み取れると考える。

では、娘と母の分離を引き起こした根源は何であろう。

留意せねばならないのは、「デメテル讃歌」での掠奪はゼウスと冥王の共謀、即ち男性が事件の元凶であったこと、及び『変身物語』での掠奪は男性による陰謀ではないが、ウェヌスがクピドに下した指示が事件の起因であったということである。一方「ペルセポネの掠奪」においては、ゼウスもウェヌスも不在の人物であり、また終盤で短く登場する冥王も脇役に過ぎない。端的にいうと、冥王はあくまで掠奪の遂行者として、娘と母の断絶を徹底的にする役割を果たした。ここで注意すべき点は、「ペルセポネの掠奪」では掠奪の原因や掠奪者の動機などは全く言及されていないことである。つまり、掠奪は男性支配者／他人による陰謀であることについての言明がない。寧ろ、元の説話での掠奪と男性等の部外者との関係性について作者はあえて回避する姿勢をとっているように見える。こうして部外者の関与度や影響力に関する情報が欠落していることにより、母娘間の結びつきが一層中心化され、同時に分離を引き起こす根源が内部にあることも暗に示される。つまり、分離に決定的役割を果たすのは母と娘以外の者ではないことが間接的に表明されているのである。

よって、「ペルセポネの掠奪」では、母娘間の内在的軋轢が分離を引き起こす根本的原因として考えられる。表向きでは、母と娘の分離は掠奪者の男性の介入により触発されたようだが、実際は母から離れたたいというペルセポネの内的願望が分離の根源であり、この願望がペルセポネを園の外に導いていくと言える。

(3) 結末

説話の結末とは対照的に、「ペルセポネの掠奪」の最後では、娘と母が離れ離れの状態に留まり、物語は所謂開放式エンディングで終わり、読者にとって想像の余地が残される。母の放浪や娘の帰還などに触れられていないことは、本小説の中心人物が娘であることの証しであり、なお母と娘の断絶を挽回出来ないことの暗示とも言える。

但し、開放式エンディングは、挽回できない悲劇的結末として読めると同時に、まだ希望が残っている結末として考えることもできる。つまり、この結末は必ずしも母娘間の完全なる断絶を意味するとは限らず、未来の新たな回復の可能性も孕んでいる、という積極的な解釈も可能であろう。

3. 4. 薔薇の象徴性

ペルセポネを惹きつける花について、「デメテル讃歌」の冒頭ではこのような描写が見られる。

(...) the narcissus, which Earth made to grow at the will of Zeus and to please the Host of Many, to be a snare for the bloom-like girl—a marvelous, radiant flower. It was a thing of awe whether for deathless gods or mortal men to see: from its root grew a hundred blooms and it smelled most sweetly, so that all wide heaven above and the whole earth and the sea's salt swell laughed for joy²⁸.

以上のように、水仙²⁹は清楚な印象であり、読者に処女の純潔さを想起させるであろう。また、『変身物語』に描かれるペルセポネの花摘みの場面は以下のようなものである。

The branches afford a pleasing coolness, and with the well-watered ground bears bright-coloured flowers. There spring is everlasting. Within this grove Proserpina was playing, and gathering violets or white lilies. And while with girlish eagerness she was filling her basket, and her bosom, and striving to surpass her mates in gathering, almost in one act did Pluto see and love and carry her away: so precipitate was his love³⁰.

クピドの矢に射られた冥王はその場でペルセポネに一目惚れし、たちまち彼女を攫っていった。以上のように、『変身物語』における花は掠奪との直接的な関係性がないため、本論では「デメテル讃歌」の水仙との比較を主とする。

一方、「ペルセポネの掠奪」における神秘で艶やかな薔薇は、ペルセポネを誘惑し、掠奪の発生に重要な働きを果たしている。

薔薇は蘇雪林の文学ではよく見られる要素であるため、蘇雪林の文脈での薔薇の意味合いについて説明しておく。擬人法で書かれた戯曲「玫瑰与春（薔薇と春）」（1927）において、薔薇

は恋人の春を愛しながらも彼女を理解しようとせず、彼女の心を傷付ける男性のイメージで登場している。結末で春は薔薇との間の齟齬を解消出来なかった末に彼と別れた。この戯曲で薔薇は異性間の愛と葛藤を象徴する。一方、カトリック信者である蘇雪林は随筆「玫瑰花串（薔薇の輪）」において個人の志向と宗教の信仰との撞着、内面の葛藤を表し、冒頭では、「薔薇は情熱的な愛の象徴であり、同時に刺を持つ植物でもある。私達は薔薇をとろうとする時、刺に刺されて傷付けられることを免れ難い。（…）私は薔薇をとる為に、しばしば十本の指とも血だらけにしている。だが、私は決して諦めようとは思わない」³¹と告白している。ここでの薔薇は愛や情熱を象徴し、作者の信念と繋がる。また、散文詩「将来」（1928）では、「路傍の石の側には芳しき薔薇の木が咲き誇っている。手を伸ばして花を折り取ろうとしたら、指が刺に刺されてしまった。真っ赤で艶めく血が傷口から流れ出て、地面に滴り落ちる。（…）指先の血痕を拭い、一本の薔薇を折り取って大事に胸元に付ける。（…）この草臥と暗闇に満ちた長旅の途中では一応芳しく優しい思い出を残すことが出来たのだろう」³²と描かれ、薔薇は暗闇の中で微かに光る未来の希望と繋がっている。さらに、自伝的小説『棘心』では、「薔薇にも刺があり、これは愛の刺だ。心が愛に刺され、傷付けられたら、癒される訳がないのだよ」³³という比喩的な表現で母の愛情と心の苦痛を描いている。この四作品はいずれも、薔薇は愛や希望と繋がり、同時に刺をもって人を傷付けるという面が表現されている。つまり蘇雪林の描く薔薇は、美しいながらも危険性をもつというイメージであるほか、母娘や恋人の間の葛藤を象徴している。

さて、本論に戻る。明らかに、薔薇といい、水仙といい、いずれの花も一瞬でペルセポネを惹きつける魅惑的なものである。但し、「デメテル讃歌」中の男性による罠であった水仙に対し、「ペルセポネの掠奪」では、薔薇は男性の陰謀であることの言明がないため、罠だと断言し難い。それにも関わらず、薔薇は依然として誘惑性、危険性を持つものである。

ペルセポネが薔薇を発見した場面、及び薔薇の外観の描写に目を向けよう。

[ペルセポネは]家からどれくらい離れたのかも知らずに、森の中で探りながら歩き続ける。ふと柔らかくて居心地良さそうな芝生を彼女は発見した。日差しが枝葉の隙間から泉水の様に注ぎ、この場所を明るく照らす。そこに入ると、まるで翡翠の谷にいる様だ。

その空き地の真ん中には薔薇の木が生えている。しなやかで優美な翠色の茎と葉に支えられ、咲き誇る十数本の花は真っ赤で血の様にも、焰の様にも見える。甘美で清々しい香りが森全体を芳香の世界にしているようだ。ペルセポネはこんなに愛らしい薔薇を見たことがないと思い、摘んで家に持ち帰ろうと決意した。（171頁）

この場面では薔薇の不思議な美と芳香が描かれるだけでなく、薔薇の生えている場所も童話の中の秘境のように描かれている。秘境に生え、少女を魅惑する薔薇は、白雪姫を誘惑する毒の林檎や、いばら姫の好奇心を喚起する紡錘等のものを想起させる。これらはヒロインにとっ

て神秘的で、誘惑的で、しかも致命的なものである。ペルセポネの場合も同様に、麗しき薔薇は誘惑的で致命的なものであり、その根元に通じているのは恐ろしい冥府である。

やっと薔薇は根こそぎ引き抜かれた。ところが、彼女はその根元にあるのは穴だと気づいた。その穴は真っ黒で、深く果てしないようであり、それを見てペルセポネはひどく驚いた。(172頁)

力を尽くして薔薇を手に入れた刹那、ペルセポネは初めて冥界の暗闇を目にしてしまった。その直後、彼女は根元の穴から突如現れた冥王に攫われる。冥府及び冥王との繋がりや薔薇の持つ危険性の端的な表現と言える。

かくして、水仙と比べ、薔薇の方は「甘い罠」、または「危うい美しさ」という魅惑的な色彩がより目立つだろう。前述の通り、小説では薔薇が男性の作った罠だとは断言し難いが、薔薇は家の外部で生え、また冥府と繋がり、掠奪者の出現と直接に関わっているのは確かなことである。従って、薔薇はペルセポネにとって、異性愛を代表とする外部の誘惑・危険の象徴だと考えられる。なお、薔薇の生えている場所の美しさと神秘さ、並びに薔薇の不思議な程に甘美な匂いは、既にこれが尋常な薔薇ではないことを仄めかしているのではないか。

以上を踏まえると、薔薇に見られる作中の冥王の役割、及び強制的異性愛の位置付けが明らかになる。それが物語における娘と母の分離の契機や根源とは言えないが、掠奪者の男性は分離を進める役割を果たす。また、異性愛は母娘間の結びつきに強引に介入し、負の影響を及ぼし、さらに母娘間の絆の崩壊を促しかねないものとして位置している。

ところで、薔薇にはもう一つの隠喩が窺えると考えられる。それは、蘇雪林の思う共産主義の危険性である。前出の薔薇の描写において、「真っ赤で血の様にも、焰の様にも見える」という表現は特に注目に値する。第1節で述べた通り、蘇雪林は『天馬集』で共産主義への反対を強く表明しており、彼女の反共の立場は周知の事実であった。また、彼女の散文、自伝や日記の中で、中共の勢力拡張は「赤化」、「赤焰」等と呼ばれ、尚且つしばしば鮮血や殺戮を伴う印象として描かれる。『天馬集』が収録した多くの小説では、共産主義は正義の対立側に置かれ、世間を惑わす残酷な悪魔と位置づけられている³⁴。蘇雪林から見れば、「中共は何らかの魔法を得たかのように、人の心を惑わせるのが上手だ」³⁵。こうして見ると、薔薇のもつ真っ赤で血や焰のようなイメージ、また魅惑性・欺瞞性は蘇雪林の共産党への印象と通じているのではないか。共産党の勝利によりやむを得ず大陸を去っていった蘇雪林は生涯、祖国への帰還を望み続け、「向こうで早く動乱が起るように、(…) そうしたら、私達のような天涯を流離う者は、「白日に放歌して須らく酒を縦にすべし」とするのではなく、「青春伴を作して好し郷に還らん」とするのだ！」³⁶と強く願っている。要するに、「ペルセポネの掠奪」の中の母、ないし母の家は故国の隠喩であり、娘の母への依存、また母から強引に切り離される際の苦しみは、蘇雪林の

抱く祖国への未練、祖国を去る際の痛みの象徴と考えられる。開放式エンディングに設定されたことは、当時大陸に帰れない作者の現状の仄めかしであり、彼女の期待、又は帰還願望の暗示でもある。また、娘と母の分離の導火線としての薔薇は、蘇雪林の思う祖国との分離を引き起こした元凶・共産主義の隠喩と見做せるであろう。

4. 花園からの逃走——ペルセポネから見る花園の両義性

ペルセポネは母の庇護下の花園の中で、精霊たちに囲まれ、和やかで屈託ない日々を送っていた。園での少女たちのはしゃぎ様、また春うららの光景はこのように描かれている。

花や草の精霊は皆仙女の様な少女の姿である。(…)地母の邸には大きな花園がある。精霊たちはそこで姫に奉仕する。地母の御成のとき、彼女たちは少し言動を慎むが、地母が行ってしまうと、姫と一緒に思う存分に騒ぎ続ける。彼女たちのはしゃぐ様子を見ると、空の黒雲まで逃げてしまい、幽谷の氷柱が溜息をつき、北風も昔のように終日怒鳴り続ける代わりに低く文句をもらすことしかできなくなる。(164頁)

以上で示された花園の光景はユートピア的であり、それを女性のエデンに喩えてもいい。だが、前述(3.3)の通り、この空間は結界のようで、外界との隔絶を仄めかしている。そのため、娘にとって、花園は庇護や安らぎを意味すると同時に、束縛や掟の象徴でもある。温室のような環境の中でペルセポネは母の愛情に育まれながら、母に依存している。同時に無意識のうちに母に束縛された無力な少女でもある。彼女は外界の不可知の危険に面する恐れが一切なく、また知恵や勇気、能動性を備えているものの、母の側に居る限り彼女は力を持つことが出来ず、自立出来ない。例えば春の女神としての職権を任されないこと、及び母に保護されていることは彼女の弱さの裏付けとして考えられる。このような娘の内面に離反心が芽生え、母の花園を出ようとする願望が密かに生ずるのは不思議なことではない。最終的にこの願望は、皮肉にも彼女が外部の男性に拉致されるという結果を招いた。

他方、以上のように小説で映されてきた分離と結びつきが絡み合う母娘関係の様相、また、母との間のもつれた感情に影響され続ける娘の様子は『棘心』の中ではさらに激しく表現されている³⁷。『棘心』では、異邦での女学生の抱く母へのアンビヴァレントな感情は祖国への想いと共に赤裸々に表されている。また、蘇雪林の経歴から見れば、若い頃に母への愛着を抱きながらも母の期待に背いて海外に留学し、後に母の病等の事情で学業を放棄して帰国した彼女は最終的に母との死別を迎えた。大胆に言えば、「ペルセポネの掠奪」を神話版の『棘心』と見做すことが可能である。前者の神話的異境と後者の近代の背景、この二つの舞台で紡がれた娘と母の物語と、初期の代表作から晩年の創作まで続く娘による母への複雑な想いは、蘇雪林が自らの母に対する感情を作品に投影したと思われる一方、ヒロインの母への思慕がこの二つの小

説を貫くテーマと言ってよいだろう。

本節の考察を通し、作者は「ペルセポネの掠奪」において、保護と束縛という二重の意味を持つ花園の空間を描き出したと考えられる。また、神話の再話である為、確かに本作には限界があり、斬新な筋書きを表現することは難しい。だが、本作は、母娘関係という蘇雪林文学での重要な主題を表し、及び異郷を流離う知識人の祖国への想いを暗喩的に表現したことによって、女性作家・蘇雪林の独創性がうかがえる神話小説となったと言える。換言すれば、蘇雪林は主体性の持つペルセポネ像を描き出し、神話の舞台で自我が目覚める娘と母の間の絆と葛藤を描きつつ、自分と祖国との分離を語った、と本作を解釈することが可能であろう。

5. おわりに

本稿は「ペルセポネの掠奪」におけるペルセポネ像に焦点を当てて、原典と照合しながら考察を行なった。まず、ペルセポネの無邪気で強情な少女という形象を明らかにした上で、母との関係性に注目し、母と娘の分離の根本的原因は、娘の内に潜む母から離れたいという願望であったことを論証した。また、作中の薔薇のもつ象徴的意味を分析した。最後に、本小説から読み取れる花園の二重の意味、及び本小説の蘇雪林文学での位置付けについて述べた。

以上のようにペルセポネ像に光を当てることにより、『天馬集』における女性の登場人物の重要性が露わになり、そして女性像への見直しも可能になってくる。かつ、個々の女性像に注目して再読することを通し、『天馬集』のもつイデオロギー以外の面の価値の再発見が可能である。他方、『天馬集』における女性像を研究するためには、ペルセポネ以外の女神像をも取り上げて検討することが必要であるだけでなく、作中の魔女像も同様に注目に値する。以上のことを今後の課題としたい。

注

¹ 1919年5月4日に北京の学生を中心に反日・反軍閥の運動、いわゆる五四運動が起き、中国各地に広がった。「中国近代文学は、文学革命[1917年。言文一致運動に相当。筆者注]を契機としこの5・4運動の前後に急成長しているため、1910年代半ばから1920年代半ばにかけてを、文学史では5・4時期と称する」（藤井省三『20世紀の中国文学』、放送大学教育振興会、2005年、54頁）。

² 蘇雪林「自序」、『天馬集』、三民書局、2018年（初版：1957年）、2頁を参照した。本文引用は拙訳である。

³ 袁昌英 1916年からイギリスに留学し、エディンバラ大学で修士号（文学）取得した。1926年よりパリ大学に留学した。蘇雪林、凌叔華と共に武漢大学で「珞珈三女傑」と称されていた。

⁴ 1952年までに「卜賽芳的被劫」、「天馬」、「森林競楽会」、「蜘蛛的故事」の四作が創作され、他の小説は台湾で続々と書き加えられたのだ（蘇雪林「關於我的天馬集」、『閑話戦争』、文星書店、1967年、136-137頁を参照した）。1957年7～9月に『天馬集』の出版の為に「銀的紀律」、「女面鳥的歌声」、「水仙花」、「尼奧璧的悲劇」の執筆が完了した（『蘇雪林作品集・日記巻』第2冊、国立成功大学、1999年、282-306頁を参照した）。

⁵ 祝宇紅『「故事」如何「新」編』第四章（北京大学出版社、2010年、173-206頁）、王璐修論『中国現代作家希蠟神話重写小説研究』付録一（紹興文理学院、2019年、41頁。王論文は付録で当時の神話再話の全体的状況、作家と作品の概要を細かく整理して表を作成しており、文学

史研究資料としての価値を持つ)を参照した。

⁶ 蘇雪林「自序」、前掲注 2、3 頁。

⁷ 祝宇紅『「故事」如何「新」編』、前掲注 5、この前後二文の記述は 198-201 頁による。

⁸ 祝宇紅「“老新党”的後裔——論蘇雪林『天馬集』与曾虚白『魔窟』对神話的重写」、『現代中文学刊』2、2011 年、50-57 頁。引用は 57 頁による。

⁹ 朱双一「蘇雪林小説的保守主義傾向——『棘心』、『天馬集』論」、『華僑大学学報』1、2000 年、63-70 頁。

¹⁰ 蔡玫姿「桑榆晚年、天馬行空——論蘇雪林至成大的第一本改編小説『天馬集』」、『雲漢学刊』34、2017 年、39-60 頁。

¹¹ 蘇雪林「自序」、前掲注 2、4 頁。

¹² 本作は最初は日中戦争末期に創作された短い散文だったが、50 年代に小説に書き直された(蘇雪林「關於我的天馬集」、前掲注 4、136-137 頁を参照した)。現在散文版の情報は不明だ。

¹³ 『蘇雪林作品集・日記卷』第 2 冊、前掲注 4、302 頁を参照した。

¹⁴ 蘇雪林『浮生九四』、三民書局、1991 年、137-138 頁を参照した。

¹⁵ 「ペルセポネの掠奪」における神名の表記と作者が注で示した原語は以下の通りである。ト賽芳 = Persephone、賽麗絲 / 狄美特 = Ceres / Demeter、柏魯托 = Pluto、宙士 = Zeus。

¹⁶ 『変身物語』は J・ミラー訳 (Ovid, *Metamorphoses I*, Harvard University Press, 1921) を参照し、「デメテル讃歌」は G・エプリンホワイト訳 (*To Demeter, Hesiod, The Homeric Hymns and Homerica*, Harvard University Press, 1914) を参照した。

¹⁷ 武漢大学 OPAC (<http://opac.lib.whu.edu.cn>) による。最終アクセス日: 2022 年 4 月 30 日。

¹⁸ 蘇雪林『浮生九四』、前掲注 14、137-138 頁を参照した。

¹⁹ 祝宇紅『「故事」如何「新」編』、前掲注 5、173-206 頁を参照した。

²⁰ 蘇雪林「自序」、前掲注 2、4 頁。

²¹ 蘇雪林『浮生九四』、前掲注 14、239-240 頁。

²² 祝宇紅『「故事」如何「新」編』、前掲注 5、200 頁。

²³ 蘇雪林は増訂版に二章を加筆し、共産主義への悪い印象、カトリック精神への称揚を表した。

²⁴ 蘇雪林「自序」、『棘心』、成大出版社、2019 年、3 頁。

²⁵ 「ゼウスは、ペルセポネが 1 年のうち 4 か月 (6 か月とする説もある) は冥界の女王として、ハデスとともに過ごし、残りの時間は地上で過ごすように命じた」(M・グラント、J・ヘイゼル共著『ギリシア・ローマ神話事典』西田実ほか訳、大修館書店、1988 年、500 頁)。

²⁶ 「ト賽芳的被劫」、『天馬集』、三民書局、2018 年。テキスト本文引用は拙訳である。

²⁷ H・シクスー『メデューサの笑い』松本伊瑳子ほか編訳、紀伊國屋書店、1993 年、54 頁。

²⁸ *To Demeter*、前掲注 16、289 頁。

²⁹ 神話における水仙は、冥府と繋がりある魔法の花、男根を象徴するもの、といった二つの意味を持つ(『ホメーロスの諸神讃歌』沓掛良彦訳注、平凡社、1990 年、37-38 頁を参照した)。

³⁰ Ovid, *Metamorphoses I*、前掲注 16、265 頁。

³¹ 靈芬(蘇雪林)「玫瑰花串」、『蘇雪林作品集・短篇文章卷』第 6 冊、陳昌明ほか編、国立成功大学、2011 年、236-237 頁。執筆年不明。編集者によると、1943 年に掲載された可能性が高い。

³² 緑漪女士(蘇雪林)「将来」、『北新』第 2 卷第 6 号、1928 年、109-110 頁。

³³ 蘇雪林『棘心』第 17 章、前掲注 24、353 頁。

³⁴ 例えば「盗火案」の中の悪魔の首領・ポルピュリオンという登場人物がそれに相当する。

³⁵ 蘇雪林『浮生九四』、前掲注 14、151 頁。

³⁶ 蘇雪林『浮生九四』前掲注 14、260 頁。詩の原文:「白日放歌須縱酒, 青春作伴好還鄉」([唐]杜甫「官軍の河南河北を収むるを聞く」。安史の乱が収束した朗報を受けた杜甫が、漸く故郷に帰れるという莫大な喜びを表すために書いた詩である)。詩の原文の和訳は松枝茂夫編『中国名詩選(中)』(岩波書店、1984 年、377 頁)による。

³⁷ 『棘心』における母娘関係については拙論「母と娘の葛藤——蘇雪林『棘心』を中心に——」(『名古屋大学人文学フォーラム』第 5 号、2022 年、1-17 頁)で論じた。